

平成30年6月18日現在

機関番号：32621

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02908

研究課題名(和文) エリトリアにおける国民国家形成と民族間関係の相克

研究課題名(英文) Nation-State building and Ethnic relations in Eritrea during 1940-1962

研究代表者

眞城 百華 (MAKI, Momoka)

上智大学・総合グローバル学部・准教授

研究者番号：30459309

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究期間中にエリトリア、イギリス、エチオピア、アメリカ、国連において史料渉猟を実施した。これらの史料の分析、突合せを行いエリトリア政治史ならびに社会史の分析を進めた。ムスリム連合ならびに自由進歩党の支持層の分析に加え、ムスリム連合から分派した西部州ムスリム連合の成立、同党の支持層となったエリトリア西部地域の社会史の分析を深めた。本研究期間中にエリトリアの脱植民地化について北東アフリカの文脈で比較検討する論文を刊行することができた。

研究成果の概要(英文)：During the period of the study, a series of historical materials were collected in Eritrea, the United Kingdom, Ethiopia, the United States and the United Nations. Analysis of these historical materials were carried out to analyze Eritrean political history and social history. I analyzed the supportive groups of the Muslim League and the Liberal Progressive Party, the formation of the Muslim League Western Province that was departed from the Muslim Union, and the social history and background of the Eritrea western region that supported the Muslim League Western Province. I published a paper to compare and consider Eritrean decolonization in the context of Northeast Africa history.

研究分野：アフリカ史

キーワード：エリトリア エチオピア アフリカ史 国民国家 脱植民地化 国際関係 民族関係 社会史

1. 研究開始当初の背景

エリトリアは1993年に30年間続いた解放闘争を経てエチオピアから独立を達成した。独立を果たしたもののエリトリアは解放闘争を率いたエリトリア人民解放戦線が改称した民主主義と正義の人民戦線 (People's Front of Democracy and Justice, PFDJ) による一党支配体制が続き国政選挙は独立後20年間一度も実施されていない。PFDJの硬直した政治運営に対する批判は国内外から高まっており、2009年からは国連安保理制裁が課されている。

エリトリアのエチオピアとの関係は、イタリアの植民地統治 (1890 - 1941)、英軍政 (1941 - 51)、エチオピアとの連邦制 (1952 - 61)、エチオピアへの強制併合 (1962)、エチオピアからの独立闘争 (1961 - 91)、エリトリア独立 (1993)、国境紛争 (1998) と常に北東アフリカの火種であった。エリトリアの脱植民地化をめぐるエチオピアの拡張主義とエリトリアに地政学的関心を示したイギリスとアメリカの1940年代、50年代の外交政策がエリトリア内部の諸政党の対立に及ぼした影響を研究した

1993年の独立まで「エリトリア史」というナショナルヒストリーも構築されておらず、また長い内戦による史料の散逸や調査の制約などにより、ながらく政治史や社会史の研究が放置されてきた。エリトリア研究においては40年代、50年代はエチオピア統合かエリトリア独立かをめぐり内部の政党対立が研究の中心となり、62年にエリトリアのエチオピア強制併合後は、エリトリアの解放闘争が研究の中核を占めた。他のアフリカ諸国と比較しても限定的な一連の研究のなかでも、もっとも研究蓄積が乏しいのがエリトリア社会に関する分析である。政党対立の分析はなされても、政党の支持母体となる民族・宗教・地域の関係、利害対立など社会諸関係について史料や調査の制約から研究が放置

されてきた。1993年の独立以後、エリトリアで国政選挙が一度も実施されない背景にはPFDJ政権が国内の諸民族、宗教、地域対立が政治化して国内の諸対立が表面化することを強く警戒している点が指摘できる。北東アフリカでは2011年に南スーダンが独立したが、2013年12月から南スーダン内の民族や地域間の対立が武力衝突という形で表出し新興独立国の基盤を揺るがしている。南スーダンの例を見るまでもなく、新興独立国が独立達成後に直面する課題は歴史的に構築された民族や宗教をめぐる対立や利害関係という亀裂をいかに克服するかにある。2009年から継続する国連制裁の影響でPFDJ政権の路線変更や新たな政治転換が予想される現在、今後のエリトリア政治、ひいては北東アフリカ政治を分析するためにエリトリア社会、特に民族関係、宗教、地域間対立のルーツを社会経済史も含めて歴史的に検証する必要性が高まっている。

2. 研究の目的

本研究は北東アフリカのエリトリアの民族・宗教・地域対立を歴史的に検証することを目的とする。イタリア植民地支配から解放されたのち、連合、国連で処遇が議論され、他方で国内の諸政党の対立がそれに呼応して激化したエリトリア史を社会史の文脈から再検討することを狙いとする。特に1940年代のイギリス軍政時代、1950年代のエリトリア自治政府期の脱植民地化からエリトリアの国民国家形成の萌芽期における民族関係を社会史の側面から明らかにすることは一面化されたエリトリア政治史の再解釈に寄与する。1993年の独立後、一党支配に注目が集まるエリトリアのナショナルヒストリーの構築に不可欠な、50年代の自治政府統治下の諸民族の関係、対立、交渉の諸相を具体的事例から解明することが狙いである。

3. 研究の方法

エリトリア、エチオピア、イギリス、アメリカ

力における史料分析を主たる研究手法とする。民族間の社会・経済的対立の諸相を明らかにするためには行政史料、裁判記録、警察報告書などの多様な内政ならびに外交史料を用いる。

4. 研究成果

エリトリアにおいて渉猟した行政史料の分析を行った。英軍政下のエリトリア行政文書をさらに渉猟するため、ロンドンの英国国立公文書館で史料渉猟を実施した。また本研究が対象とする40年代、50年代からエリトリア内政に介入を行ったエチオピアの史料を渉猟するためにエチオピアの国立公文書館を訪問した。

上記の史料渉猟の結果、エリトリア、イギリス、エチオピアで渉猟した史料の分析、突合せを行いエリトリア政治史ならびに社会史の分析を進めた。初年度に分析を行ったムスリム連合ならびに自由進歩党の支持層の分析に加え、ムスリム連合から分派した西部州ムスリム連合の成立、同党の支持層となったエリトリア西部地域の社会史の分析を深めた。西部州ムスリム連合の成立はエリトリア内の諸政党の対立の文脈に加え、エリトリア西部が隣接しているスーダンを植民地とし、また51年までエリトリアで軍政を敷いたイギリスの政治的介入が注目されてきた。しかし、成立から短期間で1952年のエリトリア初の選挙で第二党となるほど政治的影響力を発揮した西部州ムスリム連合と支持を行った西部州の諸民族との関係についてはこれまで言及が限定的であった。この点についてイギリス外交文書ならびにエリトリア公文書史料を用いて分析を行った。

最終年度は、先2年間の研究をまとめつつ、夏にアメリカにおいて外交史料館、国連アーカイブ、ならびにスタンフォード大学フーバー研究所でエリトリア史に関する史料渉猟を行った。エリトリアを取り巻く国際関係の変化により、40年代のイギリス軍政期からア

メリカ軍の駐留が始まっており、エリトリアに関する史料はアメリカにも多く、他国の外交史料、行政史料と突き合わせることで社会史の理解が深まった。また国連アーカイブでは1950年のエチオピア・エリトリア連邦制の制度構築ならびに1951年に実施された第1回国會議員選挙前後のエリトリア情勢と国連の立場を明らかにする史料の渉猟を行うことが可能となった。特にイギリスや他の刊行史料にはないエリトリア人の女性たちのロビー活動など選挙権を与えられなかった女性たちによる政治活動の一端を明らかにする史料も渉猟することができた。

一連の研究の成果を2017年度中にすべて刊行することはかなわなかったが、エリトリアの脱植民地化について北東アフリカの文脈で比較検討する論文を刊行することができた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

眞城百華「地中海を渡るアフリカ難民の検討 アフリカの角の事例から -」、『多文化社会研究』(長崎大学多文化社会学部紀要) 第3号、pp.35-49、2017年、査読無し

眞城百華「エチオピア・ティグライ州における政治と女性：ティグライ女性協会の活動を中心に」、『大阪府立大学女性学研究センター『女性学研究』、第23号、pp.67-75、2016、査読無し

[学会発表](計6件)

Momoka MAKI, “Between Occupation and Resistance: The Experiences of Ethiopian Soldiers under Italian Colonial Rule”, International Conference of Colonial Mobilization in African and Asia During the Second World War: Soldiers, Labourers and Women, Rakuyu Kaikan, Kyoto University, Kyoto, 22nd March 2018. 国際会議

眞城百華、「エチオピア・ティグライ人民解放戦線の女性兵士：武力闘争と女性

解放』、『アフリカ潜在力』と現代世界の困難の克服：人類の未来を展望する総合的地域研究』(科研基盤(S))ジェンダー・セクシュアリティ班・シンポジウム『アフリカにおける女性兵士 エチオピアとウガンダの事例から』、2017年1月29日、京都大学

眞城百華、「地中海を渡るアフリカ難民の検討 - アフリカの角の事例から - 」、長崎大学多文化社会学部シンポジウム『21世紀の「難民問題」～人道危機への向き合い方を考える～』、2016年10月22日、長崎大学。

眞城百華、「エチオピア・ティグライ州における政治と女性：ティグライ女性協会の活動を中心に」大阪府立大学女性学研究センター・国際シンポジウム『グローバル化と因習に抗する女性たち - エチオピアにおける女性支援 NGO の取り組みから』、大阪府堺市、2015年10月3日。(招待講演)

Momoka MAKI, “Women Fighter in TPLF- Women’s Agency in the Struggle and Post-Conflict Society “ , 19th International Conference on Ethiopian Studies, Warsaw, Poland, 26th Aug, 2015.

眞城百華、「エチオピア・TPLF 解放区における女性解放と女性兵士」第52回日本アフリカ学会学術大会、愛知県犬山市、2015年5月23日

〔図書〕(計4件)

眞城百華、「内戦支援からNGOへ ティグライ女性協会の活動を中心に 」、宮脇幸生編『国家支配と民衆の力 エチオピアにおける国家・NGO・草の根社会 』、大阪公立大学出版会、2018年、pp.104-139.

眞城百華、「北東アフリカにおける脱植民地化と国際秩序の再編：イタリア植民地処理と地域対立の萌芽」納家政嗣・永野隆行編『帝国の遺産と現代国際関係』、勁草書房、2017年、pp.201-226.

眞城百華、「戦う女性たち ティグライ人 民解放戦線と女性 」、石原美奈子編著『現代エチオピアの女たち：社会変化とジェンダーをめぐる民族誌』、明石書店、2017年、pp.146-179

眞城百華「食へのまなざし エチオピアにおける飢饉・飢餓の経験 」、山崖俊子・山口順子編『健康教育：表現する身体』、勁草書房、pp. 70-81、2015年。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

眞城 百華 (MAKI, Momoka)

上智大学・総合グローバル学部・准教授

研究者番号：30459309